

発言し過ぎる子・発言しない子の指導

——小学生における実践とその考察——

一 発言し過ぎる子とその指導

① 「デベン」という特效薬

少し大げさかもしれないが、小学校一年生の第一学期のしつけで、だいたい六か年の学校生活の土台はできてしまうようである。きびしいしつけを受けたクラスは、それなりにシヤンとしておとなしくなり、気ままに近い自由なしつけをされたクラスは、それに応じて少々うるさくなる。最初が肝心とはこのことかも知れない。が、わりあいと無理なく積極的に発言するのは、後者のクラスの方によく見られる。だから、一概にどちらがいいとは決められそうにもない。緩急そのよろしきを得るといふあたりが最も理想的なものかもしれない。

一年生の当初は、いわば寄り集まりで、お互いに勝手にわからず、よくしゃべる子もあれば、オシの一手で警戒している子もいる。そうした中に、HさんとK君がいた。なかなか口達者である。クラスに活気をみなぎらせてくれるので実に助かる。だが、しばらくすると鼻についてきた。こちらが山や海の話をしようものなら、間髪をいれず「あたしどこそこへ行ったことがある。」「ぼくだってあるよ。」

というぐあいにとたんにしゃべりまくるので、こちらの意図する方向へ持つていくことができない。こりゃたいへんだ。なんとかしつけないくちやならない。出すぎた杭を打つようで、いささか気がひけたが、真顔でとつくり教えてみた。「HさんにK君よ。先生が話をしているときには、よく聞いていて、思いついたことがあったら、あとで手をあげていいなさい。」と。そのときにはわかったようにならずにいた。ところが一日もたつとすっかり忘れてとみえて、またもやしゃべりだす。また教える、またケロリで、一筋縄ではいかないもんだわいと思いつつ、折があつて、同僚のI先生に話すと、「デベン」というのを伝授してくれた。横口をだしてしゃべりはじめたら、「あんたはデベンだな、話の途中ですぐ横つちよから口をだすのはデベンなんだよ、ほらほら、あんたはこんなにデベソがのびてるよ。」というぐあいにいつてやる。——というわけである。なるほど、これはいたたましよう、——早速使ってみると、これが実にききめがある。「ぼくはデベンじゃないやい。」などといつていたが、エへへと笑って落ち着いてしまう。それでもまたいいですと、こちらがニヤリと笑つて「デベソがのびたかな。」と静かにいうと、しまったという顔つきでただちに口をつぐむ。これでようやく、この二人の気持ちをしずめてあげることができ、こちらも気がねなく話をするができるようになった。I先生に感謝のほかはない。

「デベン」——これは全く特效薬である。特效薬だから、使い方に留意しなければならぬわけだが、このように用いるとききめは百パーセントといつてよい。しつけや教育には特效薬はないものだ

と思っていたが、そうでもないらしい。これはその一つである。それでもある。相手をきずつけずにやつてのけられるところに味がある。この方が小さい子どもにはよくわかるのである。理づめの論法だけでは、頭でわかって納得はしないらしいのである。そういうのは、すぐに忘れやすいというのは行動を律する規範の度合が弱いからであろう。そこからみると、「デベソ」などというのは表象的であるから、経験的にさつととらえられるし、頭にもこびりつき、よい規範になるようである。

② 発言し過ぎる子はいい子である

高学年の方にもいろいろいる。

- オシャベリ
- 先ツパシリ
- マゼツカエシ

こういうのが、あだなみたいになっている子どもがいる。一斉授業だとことさらに目に映じてもくる。こちらが劇的に話を持っていくようにすると、独特のカンでキャッチし、「こういうことなんだよ。」というふうに、先回りしてすっぱぬいてしまう。先ツパシリである。かと思うと、いらざる差出口をして話を混乱させる子もいる。マゼツカエシである。そういうことにしばしば出会うと、苦々しくなる。そこでつい、「おい！先ツパシリはよせよ。」「お前さんはマゼツカエシでよくない。」と、注意をうながすことになる。

そういう点で、過ぎたるはなお及ばざるがごとしの面はあるにせよ、しゃべり過ぎる子は、だいたいにおいてすばらしい子である。ダンマリ屋さんよりどれほどいいかわからない。枝葉のおいしげった樹木のようなものだから剪定する楽しみもある。それに頭のめぐりもわりといい。頭脳回転が早く直感力にもすぐれている。そういう積極面のみ着目すると、アイディア・マンになる素質十分である。これはクラスのために存分にはたらいてもらわなくてはならない。ただし、横口をひかえて他人の発言を落ち着いてよく聞くというルールを守ってもらうようにこちらで強く要求する必要がある。そうでないときらわれる。反感が持たれる。よいことでも受けいれてもらえなくなるからである。

中には、しゃべり過ぎが習性のようになっている子がいる。この方はどちらかというと頭のめぐりがよくない。この子がいったん発言しだすとだらだらと長いことしゃべりだし、早くやめてくれといいたくなる。こういうのに限って挙手の回数も多く、何にでも発言したがらる。わたしは、こういう子には、「つまり」と「たとえ」を使うようにすすめている。「つまり」は要約する力をつけ、「たとえ」はわかりやすくする力をつけるからである。本人が忘れたら、こちらがそばからいつてやる。あるいは、ほかの子にいわせるようにしている。「つまりなんのこと？」「たとえはどういうことなの？」というふうにある。これは案外に効果がある。そしてこの指導は、自分を運転する力、自分の論理の回転をスムーズにする力を側面か

ら援助することにもなる。

一一 発言しない子とその指導

① 一つの疑問に宿るもの

なぜ、発言する子にしなければならないのか。発言するとういうトクがあるのか。と逆に反問したくなるほどに、先生というのは「発言しない子」に腐心する。現代の教師気質の一つかもしれない。そういうことに気をかけながら、当のご本人は、というと、職員会議や各種の研究会に参加すると、おおよそのところダンマリである。何事にもへらへらと口をだす先生や、いかめしそうな理論闘争家に任せたといった感じである。もしも、教場で、「発言しなさい。」「何かいいなさい。」と二六時中いわれている子どもが、ダンマリをきめこんでいるオラタチの先生をみたら、きつと疑問に思うにちがいない。これはいったいどういふことなのであろうか。人を笑わせる商売をしている落語家や喜劇役者が、家庭ではそれほどでもないといわれる論理にも通ずるのであろうか。

人様の前で発言するということは、ある意味において勇気のいることである。多人数の研究集会で、いざ発言となると、失敗するかも知れない、反論を食うかも知れない・・・等々、いろんな思惑が頭をよぎっていく。そこには言わぬが花、沈黙は金——の民間伝承的な思想ならびに笑われることを「死」にも等しいほどにいわれてきた日本の伝統の一面も影を落としているかもしれない。

そしてなお、使命好きの高飛車な司会者などにつきあつたらた

まらない。いつ指名されるかビクビクしていなければならない。気の弱い人ほど大変である。下向いて隠れていなければならない。

でも近ごろは、小さな集会であれば、本題にはいるに先だつて自己紹介をするふうがさかんになってきた。みんながしゃべるんだからと、メーファーズの心理もはたらき気も楽になる。それに私事にわたるようなことまでいい気になってべらべらしゃべる人もおり、演説を一席ぶつ人もいる。名前と「よろしく」だけいってさつさとひっこむ人もいるし、さらには意識的に自分をPRする人もいるしで、けっこうおもしろい。いいことであると思う。先がけて、胸のどきどきをしずめ、場慣れの雰囲気をつくることになるからである。

これもである。数百人の集会では不可能である。やはり、そこには量質転化のコトワリがある。人数の多少に対応していかなければならない。——と、考えると、隣同士の意見交換、六人ほどのグループ討論などの意味も大いにあるわけだ。発言のチャンスが多くなるだけでなく、疎外感を一時なりとも脱せしめてくれるからである。そういう点で、井戸端会議や新興宗教などにみられる数人の車座談義のしゃべりあいのよさもわかるような気がする。

いずれにせよ、発言すると、自分の感情なり発言なりを客観視することになり、それを鍛えぬくことになるから悪いとはいえない。それにさまざまな情報が得られるという点でトクになることも請け合える。

① 逆手ともいうべき一つのありかた

右のような筋道は、ある面で、そのまま教場に持ちきたすことができる。それを地で行っているのが、予想を立てさせて事を運ぶという「仮説実験授業」のあり方である。この授業の討論の原則をいくつかみるとよくわかる。六つほどあげてみよう。何もむずかしいことはなく、まことにもって簡単至極の原則である。

- (1) しゃべりたくなかったら無理にしゃべらなくてよい
- (2) しゃべりたい子だけ存分にしゃべればいい
- (3) ことさらめいての指名はしない
- (4) 先生は話しあいの中にできるだけ介入しない。(一方に味方をしたりコレゾと思うある子の考えをとりあげてその方へ誘導したりしない。)
- (5) 他人の発言にチェックしていくこと。
- (6) あらゆるものを総動員してたちむかうこと。

これだけのことで、おもしろいことに、この逆手が、一面において、「発言しない子」をして「発言する子」へといざなうはたらきをするから妙といえば実に妙である。が、そのなぞはすぐさまとける。

- (1) と (3) とで、気心を楽にし、いやな緊張をとりのぞく。
- (2) で、発言し過ぎる子を精いっぱい活躍させる。だから、「発言し過ぎる子」という「特待生」は消滅する。

(4) で、学習の自主権をかれらが獲得する。比喩的にいうと、先生は、おしゃかさまの掌になって、その中で子どもたちの孫悟空を

あばれさせればよいというわけである。以前にこんな経験をしたことがある。討論の中にわたしが介入して誘導をしはじめたのである。

そしたら、いわゆる「発言し過ぎる」F君が、それに感じて、まっかになっておこりだした。「なぜ先回りしているのか、それだったら答をいってしまったと同じではないか。」とえらいけんまくでおこりだしたのである。そのとき、こちらが先生だからと遠慮して自分をおさえてくれたにちがいないが、子ども同士だったらなぐりあいをはじめたであろう。わたしはびっくりして、「みんながよくわからないと思ってやったのだ。」とへたにくどいいわけをしたが聞き入れてくれない。「もう答をいったのと同じだ、ぼくがいうつもりだったんだ。」と、最後には泣きだす始末である。これには驚いた。それ以来、F君は一か月近くも発言することをしなかった。すごいレジスタンスもあつたものである。考えてみればもつともなことなのである。彼らに学習の自主権を与えるなどとうまいことをいいながら、それを踏みまじろうとしたことにも似ているからである。この子はいま六年生である。クラス内の一流人物になっている。仮説実験授業で育てた理想的人物のひとりである。そういう次第であるから、「島小」やそれに類した授業によくみかける、先生と子どもが格闘し、ねじふせるというような名授業、イカニモ授業はやらない。先生は裏方に回って、かれら自身にのぼらせていくといった授業を準備し、運営をはかっているのである。

(5) で、他人の発言に耳を傾けさせる。他人の発言をしたら何とか反応するというわけである。賛成なら賛成、わからないならわ

からない、口でいえなかったらウナズクとかカブリヲフルとかさせるのである。それもいやだったら、心の中で、その発言に○×をつけていけというわけである。

(6)で、きつい強制じみた面を除去する。たとえば既習事項を使って考えろというようなことをとくに強調はしない。何を動員してもいい。とんでもない考えでもいいし、単なる経験でもいい。何もなかったら自分の気持ちや感じにたよってみろ、というわけなのである。

以上が先にいったなぞのいわば「こころ」である。このように学習のありかた自体を根本的に改めていくと、発言しない子も発言するように、徐々に、あるときは一挙に登場してくるものである。したがって発言する子・しない子の問題はコテサキにかかわる技術の面も見落とすわけにはいかないが、「授業」なり「学習」なりへのこちらの対し方・姿勢・思想とも深い関係を持っていると考えてよいであろう。

③ 賞揚するところ(じや)

ここまでくると、次に問題は発言しない子が少しでも発言し始めたときにどうするかである。また、もともととした発言の中にぴかりと光るものをはっけんしたときにどう対処するかである。これについてはわたしは、三つの賞揚形態をとっている。一つは物質的賞揚であり、二つには精神的賞揚である。そして三つ目にはその中間形

態である。

物質的賞揚は、4、5年くらいまでがいい。ちよつとも発言した折をみつけて「アンタ、キョウ、ヨクシヤベツタ、エライ。オダチンニコレアゲヨウ。」といって、溜まっている落し物の中から、ケシゴムなどをえらび、その子の手にのせてやるのである。裏づけの確認である。精神的賞揚というのは、授業のあとに呼び寄せたり、またはその子のところへ近づいていって、「キョウノアノ考エハスバラシイ。タイシタモンダ。」と、口でいってやることである。物質的な裏づけのない心だけの確認である。中間形態というのは、「Aサン。キョウイツテクレタアノ考エ方ハ思考実験トイウヤリカタデス。アレハタイヘンニヨイ考エ方ダカラ今後モトキドキヤツテゴランナサイ。」というように、紙片に簡単に書いて渡してやることである。

証拠を残す確認のしかたである。この中間形態をやりはじめたのは四年前であるが、そのころははがきに書いて投函したものであったが、おっくうになることとハガキ代がかさむということもあって長続きせず、今のような簡便法をとるようにしたのである。

こうした賞揚のやりかたで、わりあい多くの発言しない連中をすくいあげて持続させることができた。やはり、機会をつかんで「ほめる」ということは、すばらしいはたらきをするものである。ここにおいて、「人をほめることが道が開ける唯一の土台だ。」(小林秀雄)という言葉もかけねなしに受けとれるのである。それが、自分の意志というより「義務」という形で登校している小学生を思うと、なおさらに「唯一の土台」であることが身にしみてわかるのである。

しかし、それはあくまでも「唯一の土台」であって、それでわたしども教育活動は終りを告げるということではないであろう。その「土台」の上に何を建設せんとするのか、ご本人様の前進力を踏まえて、教育はまさにそこから出発するといつてさしつかえないのである。

かく思うにつけてもわたしの心にかかって離れないのは、六年後半の子どもたちのことである。思春期に足かけはじめた子ども何人かは、それまでと打って変わってだまりこんでしまう。人様の前で失敗しまいという念が支配しているらしいのである。ここをどうするか、わたしはまだこれといえるてだてをみつけてはいないのである。

(成城学園初等学校教諭)